

「FDシンポジウム」に参加して（授業評価・授業研究報告書）

保健体育講座・福田 隆

1 佐藤栄作先生の話から

「坊っちゃんのことなんて、何も知らなかった」のテーマから始まる話を聞き、自分の置かれた状況を再確認することができました。「勤務地の環境、職場での仕事・研究背景が十分に分からない状況で活動が始まり、気が付いたら多方面で役職についていた。」「世間から求められる一流ではなく、排除される三流でもなく、二流に踏み留まる。これは、自分のためには必要であり、組織にとってはマイナスではない。」「多くの当て職を体験し、良く分からない状況で組織運営にあたり、最終的に納得のいく仕事ができた。」自分自身の経過と同じであることに感銘した。

2 自分の経過について

日本体育大学大学院修了後、大阪府立大学総合科学部で5年間勤務し、その後、愛媛大学教養部に転勤しました。しかし、教養部改組に伴い意思とは別の背景によって教育学部に配属されることになった。

研究面においては、バイオメカニクス（スポーツ科学）的側面から身体運動の分析をテーマに活動を行っていた。しかし、最初の職場でバレーボール選手のトレーニングに関する研究のお手伝いの依頼を受けて以降、トップレベルのバレーボール競技者を対象とする研究活動に流れが変わってきました。特に、1990年から2000年までの間は、ナショナルチームのスタッフとしてアナリストのポジションが与えられ、自己満足と共にオリンピック6位の結果も残すことができた。また、本学バレー部の実績を高めることはできましたが、経験・知識の多くは未開封となっています。

3 隣の先生が何をしているか分からない

今回の話の中で、最も印象に残ったことに、話題提供者の教育・研究活動の状況がよく分かりました。特別支援教育においては、長期入院者に対して学習支援を行っている。美術教育では、道具貸出等の授業支援体制の構築を行っている。これらのことは、全く知りませんでした。一方、初めて私の部屋に来られた教育学部教員が、福田の専門がバレーボールであることを初めて知ったと聞き、ショックを受けました。

このような現状で良いのだろうか？同じ組織で、同じ志を持ちながら、お互いが殆ど理解できていない。理解どころか、何も知らない。これでは、共同研究も全く不可能であり、互いに・組織として向上することは艱難でしょう。

4 小刀の持ち歩き禁止

法律上持ち歩き禁止であるが、生活環境の変化と共に、鉛筆を削ることがなくなり、小刀の必要性がなくなる。また、教育現場では安全指導が重視され、子供を危険な状況から遠ざけようとする。

「大人の思い込みが子供をダメにする」という話を聞いたことがある。また、危ないからダメ！他人に迷惑をかけるからダメ！こんな場面をよく目にする。さらに、キャッチボール禁止の公園が増えている。保健体育の教員として時代背景・環境・政治等の多くの要因を常に把握することの必要性は理解しているつもりである。しかし残念ながらこれらの要因を変えうる力は、私には存在しません。何とか学内において、太陽の光を受け、風を肌で感じ、大きな声を出し活動できる自由な空間の復活を願っています。

教育の原点は、五感をフル活動させることである。また、痛みや苦しみを乗り越え、多くの失敗経験の積み重ねが必要である。このような体験が可能な教育環境を提供したいと考えています。

5 地域貢献

愛媛大学総合型地域スポーツクラブは、小学生を対象とする活動と成人を対象とした活動を行っています。小学生の遊べる環境の減少とスポーツ指導者の不足から、体力・運動能力の減少は大きな問題となっています。愛媛大学の地域貢献をテーマに活動を続けていますが、どの様な評価がなされているのか、全く不明です。

私は、バレーボール教室を担当していますが、大学の行事が無く、バレー部の試合がない土曜日の午後を全てこの事業に当てています。自分の使命感とバレー部の協力で続けていくことができたが、今後の継続に多くの不安を持っています。大学としての地域貢献を考えるにあたり、単なるボランティアとしての活動では、継続は無理でしょう。